

源氏物語図典



秋山 虔
小町谷照彦
須貝 稔

編

作図

源氏物語図典

1997年7月10日 初版第1刷発行

編者 秋山 虔 小町谷照彦

作図者 須貝 稔

発行者 上野明雄

発行所 (株) 小学館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋2-3-1

電話 編集 東京 (03) 3230-5137

制作 " (03) 3230-5333

販売 " (03) 3230-5739

振替 東京 00180-1-200

印刷 図書印刷株式会社

・造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、「制作部」あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

☐本書の全部または一部を無断で複写(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(☎03-3401-2382)にご連絡ください。

©Ken Akiyama/Teruhiko Komachiya/Minoru Sugai 1997

Printed in Japan. ISBN4-09-362061-X

源氏物語図典

江蘇工業學院圖書館
藏書章

秋山 虔

小町谷照彦

編

須貝 稔

作圖

はしがき

古典は、現代に新生する。新生してやまないのが古典であるといえよう。その古典中の古典が、源氏物語であるということは、それが現在きわめて分厚い熱心な読者層に迎えられていることから、おのずと明らかである。

顧みれば、源氏物語が書かれた、その同時代において源氏がいかに人々の心を奪うものであったかは、作者紫式部の証言からも何程かうかがわれるが、とりわけ顕著な例は作者と生存時期を若干共有したとおぼしい菅原孝標女の更級日記に語られた源氏物語享受の在り様である。彼女にとって源氏の世界はそのまま現実であり、光源氏や薫大將がやがて現前するであろうことを期待しつつける少女時代を生きたというが、そうした源氏物語への傾倒は必ずしも彼女にのみ限られた特殊例ではなかっただろう。以後に創作された大小の物語はいうまでもなく、さらにまた六国史を継ぐべく編述された栄花物語のごとき史書にさえ、源氏物語の影響はきわめて著しい。まさに源氏物語の強烈な呪縛力が実感されよう。絵画芸術として高く評価されている国宝源氏物語絵巻の制作も源氏の卓越した達成に触発されたことであろう。歌人たちにとって詠作のための必須の拠り所として重んじられるようになったが、こうした源氏物語がやがて研究の対象として俎上にのぼせられるに至ったのは、さまざまの享受状況に対応して、その真価がどのように見えわめられ評定されるべきか、いわば源氏物語の世界それ自体がこれを要求するものであったといえよう。

源氏物語の成立した一条朝は藤原時代の最盛期であったが、時代が降るに従い、そうした過往の黄金時代の輝かしい文化遺産として源氏物語が賛仰されるに至ったのは当然であっただろう。これを研究し、その世界を所有し、またその世界に所有されるという営みによって源氏学の伝統が培われることになったのである。そうした研究の歴史には時代時

代の人々の心の証言を読むことができ、それ自体が文化史の一翼を担うものとなったが、そのなかで大きく位置を占めるのが、いわゆる有職故実の学であった。

いつたい時代が推移して社会制度や生活慣習などが変動していくとき、後代の認識では過去のそれが分かりにくくなるのはやむをえないことであつた。源氏物語に關しても、当時の言語生活はもとより、官職、年中行事、日中・月並・臨時の行事、通過儀礼、服飾、調度、建築、交通手段、信仰、遊戲・娛樂等々についての知見を蓄えなくては、正しくこれを解説することはできないのである。しかしながら、それらがかつては自明のこととしてことさらに意識されなかつただけに、同時代から遠ざかれば遠ざかるほど、細部について知ることが困難となるのは余儀ないことであつた。

もとより同時代には朝廷の公事の記録を主目的とする天皇・摂関・廷臣らの日記がある。それらが儀式・行事の比重の増大した宮廷貴族生活における先例故実を知るべき貴重な史料であることはいうまでもない。先例への随従・尊重から、そこにおのずと家流が生じ、『延喜式』を完全撰進した貞信公藤原忠平の二子、小野宮実頼・九条師輔以来の二流が子孫に伝えられたが、これを収取した源高明の『西宮記』、藤原公任の『北山抄』は、降って院政期に成立した大江匡房の『江家次第』とあわせて、王朝期の儀式・作法を探索するための宝典であるといえよう。

院政期から鎌倉時代にわたって簇出した有職故実の書は、新時代における社会変動により一途に衰退していくほかに旧文化の遺産をわが存在にかけて集成する公家有職の営為であつた。そこには宮廷文化の伝統の継承者として矜持があり、それが己れの精神的特権の証でもあつたのだといえよう。古今集や伊勢物語などともに源氏物語が手がけられ、その価値が宣揚されることになったのも、やはり公家としての己れの存在証明としてであつた。鎌倉期の研究の集大成として四辻善成の『河海抄』が編述されたが、それは有職故実の宝庫でもあつた。これを受ける一条兼良の『花鳥余情』『源語秘訣』『源氏物語之内不審条々』『源語装束抄』など、これらを受ける宗碩の『源氏男女装束抄』のごときは後世に規範的意義をもつ考証的研究の成果であつた。以後、古典研究と有職故実は不可分に相渉りつつ現在に至っているが、そのことの意義については現在とくに重視しなければなるまい。

いつたい現在の広汎な源氏物語への関心は空前というべきだろう。最新の研究にもとづく各種テキストが刊行され、

作家が精魂を傾注した現代語全訳が数種版を重ねている。さまざまの斬新な梗概書、翻案や評論も少なくない。幾種類かの漫画も流布している。源氏物語は難解な現代小説よりも現代人に親しまれているといえるかもしれない。しかしながら源氏物語が現代人の関心の座標に引き据えられるとき、どうしても引き据えることのできぬ大切な何かが取り残されてしまうということがないか。我々は、現代に生きる己れであることから離脱して源氏物語の世界に向かって全的に転位し、その世界に抱き取られようとする姿勢を培いたいのである。そうであってこそ源氏物語との真の出会いの経験の重い意義を実感できるというものであろう。

本書は右のようでありたい源氏経験に資すべく編まれたものである。源氏物語の世界の人々が生きた風俗・習慣の物心万般にわたり、これまでの研究成果にもとづいて信頼すべき史料に取材した図版を体系的に集成したものであるが、有職故実の単なる図録であるにとどまらず、それらにかかわる物語中の記載を示しながら解説することを旨とした。図版と解説とが提携しつつ読者を源氏物語の世界へ誘導する、そのもっとも有能な案内役であらうとするのが本書の眼目であるといえよう。

平成九年五月

秋山 虔

小町谷 照彦

目次

京と宮殿	9
------	---

平安京	9
-----	---

後宮・殿舎	20
-------	----

京内の主な建物	23
---------	----

建築物	24
-----	----

寝殿造	24
-----	----

1. 寝殿造と建物	29
-----------	----

2. 建物外部	30
---------	----

3. 庭園	34
-------	----

4. 建物各部	38
---------	----

5. 室内建具(屏障具)	42
--------------	----

調度	44
----	----

1. 家具(収納具)	46
------------	----

2. 座臥具	51
--------	----

香具	52
----	----

乗物	68
----	----

1. 車	70
------	----

2. 輿	75
------	----

3. 馬	78
------	----

4. 船	79
------	----

衣服	80
----	----

1. 男性衣服	82
---------	----

2. 女性衣服	94
---------	----

3. 法服	102
-------	-----

4. 布と紐	103
--------	-----

3. 照明具	55
--------	----

4. 暖房具	58
--------	----

5. 整容具	58
--------	----

6. 飲食具	62
--------	----

7. 文房具	66
--------	----

色・文様……………104

1. 染色・織色……………104

2. 襲の色目……………110

3. 文様……………114

音楽・舞楽……………120

1. 音楽……………122

2. 舞楽……………130

3. 踏歌……………134

4. 神楽歌・東遊……………134

5. 催馬楽……………138

6. 風俗歌……………139

7. 調子・律・呂……………139

遊戯・娯楽……………140

信仰・宗教・俗信……………146

1. 病氣と修法・霊……………146

2. 俗信……………147

3. 神道……………150

4. 仏教……………154

5. 陰陽道ほか……………160

6. 卜占……………163

年中行事・儀式……………164

1. 年中行事……………164

2. 公事・儀式……………182

通過儀礼……………184

1. 懷妊・出産……………184

2. 袴着……………185

3. 元服……………185

4. 裳着……………186

5. 結婚……………186

6. 算賀・御賀……………187

7. 臨終・葬送……………188

8. 服喪・忌み 189

9. 法事 190

10. 墳墓 190

貴族生活の諸相 191

1. 消息 191

2. 病氣 193

3. 容飾 194

4. 裁縫 196

5. 飲食 197

6. 教育 200

植物・動物 201

六条院の前栽 202

ゆかりの植物 208

宇治の山里 209

山野の草木 211

古詩歌の引用 212

神事・仏事 212

染色 213

鳥 214

虫 216

1. 植物 217

2. 鳥 220

3. 虫 222

4. 獣 223

5. 魚・貝 224

付録 225

物語の概要／官職一覧／系図／
地図／地名・歌枕一覧

索引 253



平安京復元模型

京と宮殿

平安京

平安京は、桓武天皇が延暦十三年（七四四）十月二十二日現在の京都時代祭の日）に入ったのをはじめとする。三方を東山・北山・西山に囲まれ、東の賀茂川、西の桂川（西川）に挟まれて位置しており、東京極大路あたりに中川が流れていた。天元五年（九一〇）ごろに書かれた慶滋保胤の『池亭記』によれば、右京は開発が進まずに荒廃し、左京が発展して四条以北に人家が集中していたとされているように、平安京は北東の方向に発展していった。賀茂川東の白川が院政期になると発達したのも、この表れである。

【平安京概説】

ここでは、平安京内の主な『源氏物語』ゆかりの地を概説したい。平安京北側が一条大路で、ここは賀茂祭の行列の順路になり、葵の上と六条御息所との車争いがあった。祭りの様子は「一条の大路、所なくむくつけきまで騒ぎたり。所々の御棧敷、心々にしつくりたるしつらひ、人の袖口さへいみじき見物なり」(葵)とあり、棧敷が大路際や邸内に作られて見物されていた。落葉の宮と母一条御息所の邸が一条の宮で、落葉の宮と結婚した柏木や、柏木死後に夕霧もここに通った。

二条大路は大内裏の朱雀門に面し、斎宮が伊勢へ下向する際の順路になる。「二条より洞院の大路を折れたまふほど、二条の院の前なれば、大将の君光源氏」とあはれにおぼされて「賢木」とあり、斎宮一行は、朱雀門から二条大路に出て、西洞院大路を南折したが、そこに光源氏の二条院があった。古注は陽成院をそのモデルとするが、異説もある。二条東院も桐壺院から伝領した光源氏の邸宅で、二条院の東側にあった。右大臣一族が住んだ二条の宮もある。また、後院の冷泉院(↓二三ページ)も大内裏の東側にあった。

二条大路南側の三条には、朱雀門の南側に大宇寮(↓二三ページ)があり、夕霧が入学した。西の京には朝廷の倉庫である穀倉院があり、この財物が光源氏の元服や四十賀の際に使われている。その隣には、かつては八町を占めた神泉苑という禁苑が今日に続いてある。このほか、

三条には、藤壺、左大臣北の方、女三の宮の邸があり、いずれも三条の宮とされている。藤壺の三条の宮は里邸になるが、位置は不明。左大臣北の方邸で孫の夕霧と雲居雁が育てられ、二人の幼恋や夕霧の元服もここで行われた。二人が結婚して住んで、三条殿とされた。女三の宮が朱雀院から伝領した三条の宮には、光源氏没後に移り住み、薫の本邸にもなった。「早蕨」巻に二条院に近いとある。「椎本」巻で焼失し、「総角」巻で再建されている。また、浮舟が一時隠れ住んだのも「三条わたり」の小家であった。

四条には、後院の朱雀院が朱雀大路西側に八町を占めてあり、そこへの行幸が「紅葉賀」巻で語られ、光源氏の兄朱雀帝も譲位後に住んだ。

五条大路は「むつかしげなる大路のさま」(夕顔)とある。「行幸」巻の大原野への行幸は、「朱雀より五条の大路を西ぎまに折れ」て桂川に向かっている。五条の西の京に光源氏の乳母の家や夕顔の隠れ住んだ家もあった。

六条には、六条御息所の故地を取り込んだ「六条京極のわたり」(↓六条院↓二八ページ)が造られたが、古来、源融の河原院(↓二三ページ)がそのモデルとされる。この地域は「下つかったの京極わたりなれば、人げ遠く、山寺のいりあひの声々にそへても」(落標)とあり、賀茂川を隔てた清水あたりの鐘の音も聞こえていた。

七条には朱雀大路を挟んで東西に迎賓館である鴻臚館があった。光源氏が高麗の相人と会ったのがここになる。また、東西の鴻臚館から二

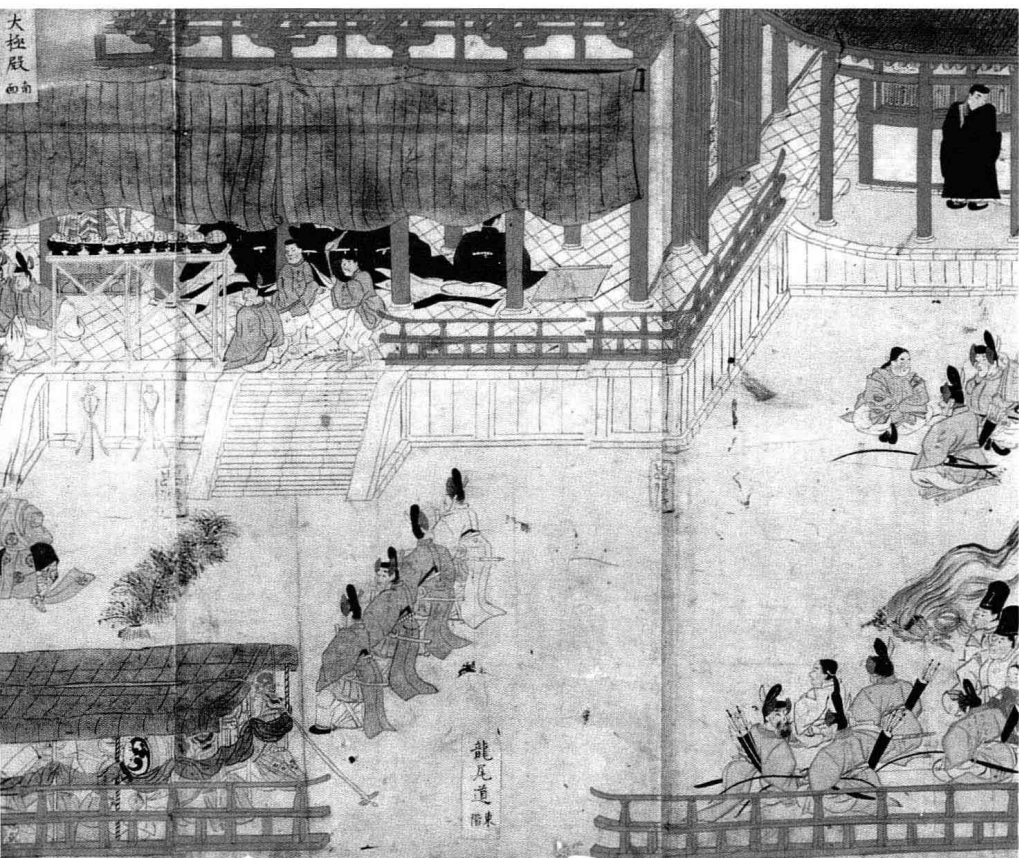
町隔てて東西の市が置かれた。市で商う女を市女といい、「玉鬘」巻で語られている。九条は「はかばかしき人の住みたるわたりにもあらず」(玉鬘)とされるような所で、そこに九州から上京した玉鬘一行が落ち着いた。九条大路に南面して建っていたのが東寺と西寺の官寺である。

平安京条坊図

平安京は、条里制をしいた唐の都長安などを範として造られたため、東西千五百八丈(約四・五)、南北千七百五十三丈(約五・三)の南北に長い長方形の区域が、大路や小路で整然と区画されていた。北側中央部に大内裏が置かれ、大内裏の南側中央の朱雀門から南端の羅城門まで南北にはしる朱雀大路を中心として左京(東京)と右京(西京)に分けられた。嵯峨天皇の唐風謳歌時代に左京は洛陽城、右京は長安城と命名され、京洛・入洛などという場合の洛は、この洛陽城によっている。一条大路と土御門大路の間を「北辺」とし、土御門大路と中御門大路および二条から九条までの大路によって南北を九条に分け、左右の京それぞれを東西の四区画に区切る大路によって囲まれた部分を「坊」とした。条坊制という場合の坊である。左右の京それぞれに南北に九条、東西に四坊(朱雀大路から一坊、二坊というようにに数えた)となり、何条何坊で示された。各坊は四つの「保」に、各保は四つの「町」に分けられたので、一坊には十六の町があることになる。寝殿造住宅は、広さ四十丈四方(約一万四五〇〇平方)となるこの町が単位となっている。なお、物語などで語られることはないが、町はさらに東西四行、南北八門に割って三十二の「戸主」に分割されたが、これが一般の民家の基準となっていた。

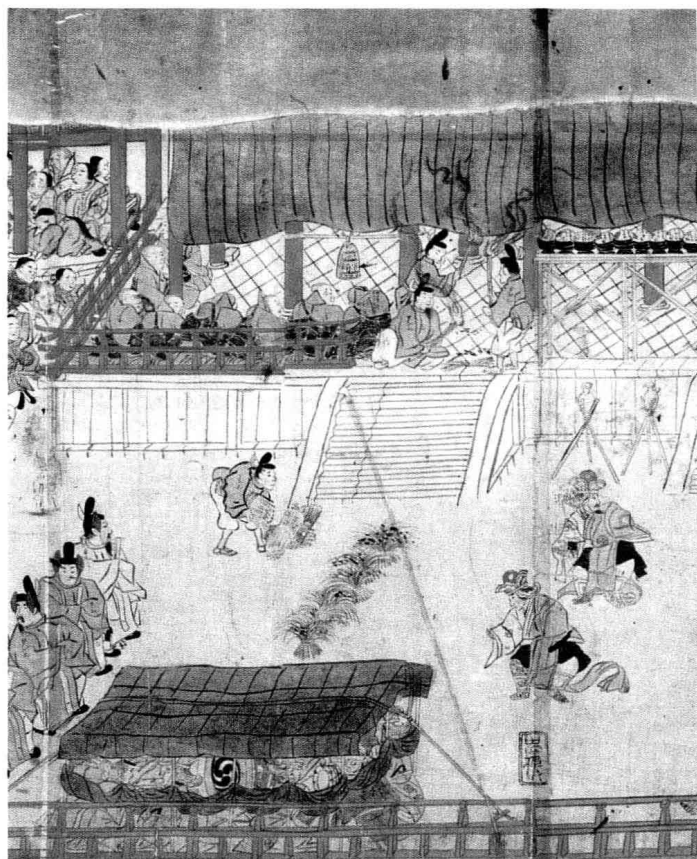


- 1 内裏 2 朝堂院(八省院) 3 豊樂院 4 真言院 5 朱雀門 6 羅城門 7 宇多院
8 一条院 9 染殿 10 清和院 11 土御門殿 12 高倉殿 13 京極殿 14 枇杷殿
15 小一条殿 16 花山院 17 本院 18 菅原院 19 高陽院 20 近院 21 小松殿
22 冷泉院 23 陽成院 24 小野宮 25 穀倉院 26 大学寮 27 神泉苑 28 堀河院
29 閑院 30 東三条殿 31 鴨井殿 32 小二条殿 33 右京職 34 左京職 35 弘文院
36 御子左殿 37 高松殿 38 西三条殿 39 奨学院 40 勸学院 41 朱雀院 42 四条後院
43 六角堂 44 淳和院(西院) 45 紅梅殿 46 五条院 47 小六条殿 48 河原院
49 中六条院 50 六条内裏 51 六条院 52 海橋立六条院 53 西市 54 鴻臚館
55 東市 56 亭子院 57 西寺 58 花園殿 59 東寺 60 施藥院 61 九条殿



平安神宮・大極殿

朝堂院 ちようどういん 朝堂院は「八省院」とも呼ばれ、八省百官が朝参する所の意で、本来は、朝賀や即位、その他の大札が行われた。回廊に囲まれた内部は三つの区画からなり、応天門から入ってすぐが「朝集堂院」で官人が出仕の際に集まる所、会昌門をくぐった中央部が狭義の「朝堂院」で十二の堂からなる官人が列座する所、北側が竜尾壇を境とした一段上の「大極殿院」で天皇出御の際の正殿になる大極殿や小安殿がある。「賢木」巻に伊勢下向に際して参内した斎宮（秋好中宮）の出発を待つ様子として、



大極殿（年中行事絵巻）

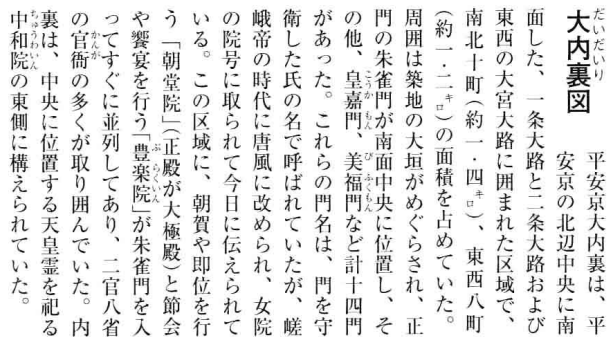
「出でたまふを待ちたてまつるとて、八省に立て続けたる出車どもの袖口、色あひも、目馴れぬさまに心にくき気色なれば」とある。斎宮は昭訓門から出るのので、これは女房の乗る出車が八省院（朝堂院）の東側あたりに立ち並んでいる光景になる。

大極殿 だいくてん 平安京最大の唐風の建物で、左右に蒼竜楼・白虎楼を従えて、正面十一間、奥行き四間の大ききなり、四周に朱欄をめぐらしている。屋根は緑釉瓦葺で大棟に一对の鶏尾を持ち、

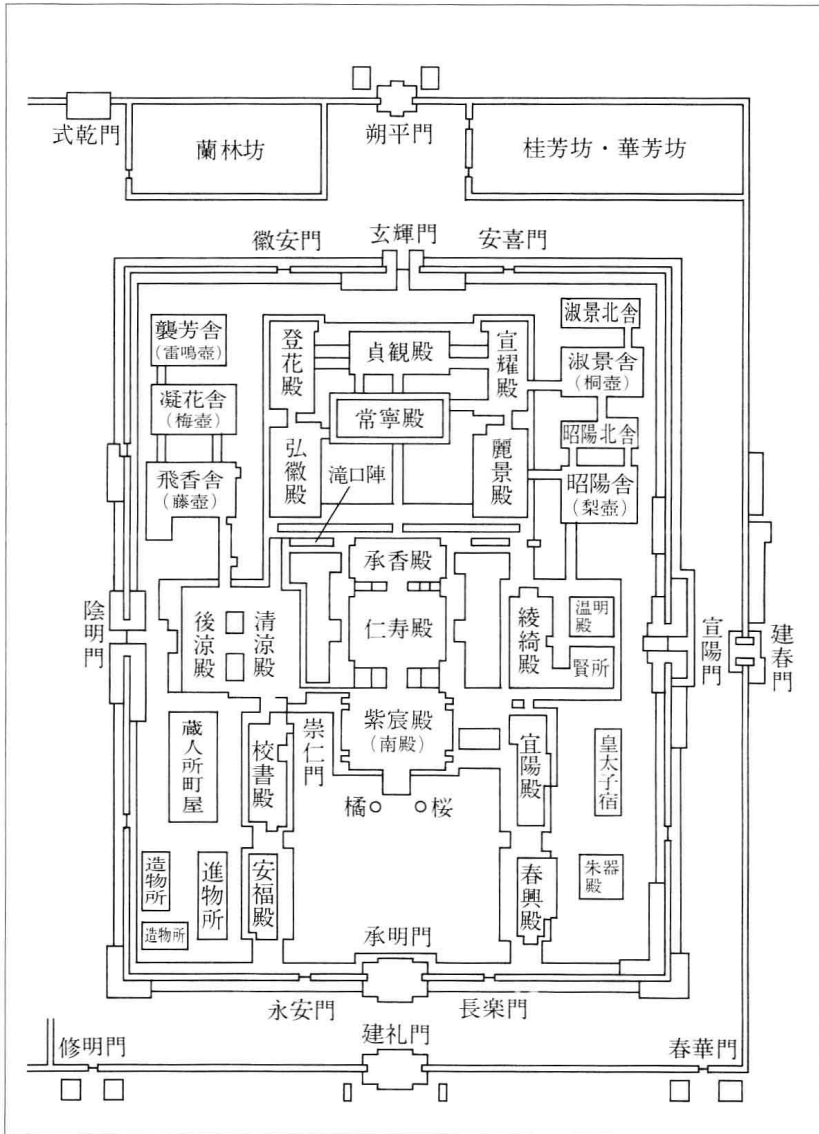
平安神宮・応天門



元は寄棟造であったが、入母屋造にされたらしい。床は石敷で、母屋中央に天皇の御座となる高御座が置かれる。現在の平安神宮の社殿は、この大極殿を三分の二に縮小して再現したもの。斎宮は、伊勢下向に際して、大極殿で天皇から「別れの櫛」（↓五九ページ「櫛」）を挿してもらった儀式が行われるが、その様子が「賢木」巻で語られている。朱雀帝は、この斎宮（秋好中宮）を終生忘れ難く、「斎宮の下りたまひし日の大極殿の儀式」（絵合）などを絵にして贈り物にしている。



平安京内裏図



内裏図

内裏は、天皇が常住する御殿、皇居のこと。内裏は、大内裏の中央東寄りの地に南北百丈(約三〇三メートル)、東西七十三丈(約二二〇メートル)の面積を占め、正殿である紫宸殿、天皇の住む仁寿殿(後に清涼殿)、後宮を形成する承香・常寧・貞観・麗景・宣耀・弘徽・登花の七殿と昭陽・淑景・飛香・凝花・襲芳の五舎、および神鏡を置く温明殿(内侍所も)、入浴と斎服を着る綾綺殿、宝物を収める宜陽殿、武具を置く春興殿、文殿ともいう校書殿(藏人所も)、葉殿ともいう安福殿ほかの建物があった。

現在の京都御所は、土御門東洞院殿と呼ばれた里内裏の一つがあった所で、北朝の光厳天皇が元弘元年(一一三三)九月に踐祚を行って以来、東京遷都まで、幾度の炎上を経ながら皇居とされてきたもの。現在の建物は、江戸時代の寛政二年(一一九九)に裏松光世(固禪)の考証に従って平安時代の古式に復元したものが焼失したため、安政二年(一八五九)にさらに再建されたもの。